

労働運動研究

— 人権、共生、福祉、環境のために —

特集 20世紀社会主義の検証 シンポジウム

ミレニアム・シンポジウム 20世紀社会主義の検証

東京グラムシ会 労働運動研究所 共催

開会の挨拶

左翼であることの共通の土台

民主主義と両立する左翼

イタリアの社会主義

ヨーロッパ社会主義

見るべきものは見た、その上で

労働運動研究所

労働運動研究所

名古屋大学

イタリア研究者

一橋大学

思想家

柴山健太郎

植村邦

後房雄

佐藤紘毅

加藤哲郎

鈴木正

加藤反乱後の政局と2001年参院選政治決戦

欧州連合が基本権憲章に調印

ヴィクトリアの自伝が生れるまで

嘉手納基地包囲行動と那覇市長選

グローバル化とIT革命に挑戦するヨーロッパ社会民主主義

崩壊する立命館大学の民主主義

英国だより (37) つぎの元首選びは国民投票で

韓国だより (18) 「冬闘」に向う労働運動

政治アナリスト

行政評論家

労働運動研究所

沖繩大学

労働運動研究所

大郷武史

野村光司

山本菊代

新崎盛暉

米澤鐵志

山本光子

大畑龍次

2001 No.375

1

E-mail : rohken@netlaputa.ne.jp

URL: <http://www.netlaputa.ne.jp/~rohken/>

労働運動研究所

2001年1月号

特集 20世紀社会主義の検証 シンポジウム

ミレニアム・シンポジウム 20世紀社会主義の検証 …	2
東京グラムシ会 労働運動研究所 共催	
開会の挨拶	柴山健太郎
左翼であることの共通の土台	植村 邦
民主主義と両立する左翼	後 房雄
イタリアの社会主義	佐藤紘毅
ヨーロッパ社会主義	加藤哲郎
見るべきものは見た、その上で	鈴木 正

加藤反乱後の政局と2001年参院選政治決戦

.....	大郷武史	16
欧州連合が基本権憲章に調印	野村光司	20
ヴィクトリアの自伝が生れるまで	山本菊代	24
嘉手納基地包囲行動と那覇市長選	新崎盛暉	28
グローバル化とIT革命に挑戦するヨーロッパ社会民主主義		29
崩壊する立命館大学の民主主義	米澤鐵志	30
英国だより (37) つぎの元首選びは国民投票で	山本光子	15
韓国だより (18) 「冬闘」に向う労働運動	大畑龍次	33

焦点 日本軍の性暴力を裁く国際女性戦犯法廷	1	新年名刺広告	38
花岡訴訟東京高裁和解についてのコメント	戦後補償ネットワーク	14	
列島の鼓動 名古屋あおぞら裁判で勝訴/マツダ自動車が希望退職者の募集へ/千葉県松戸市における本土寺参道買収問題/栃木県知事選で元今市市長が当選			34
「連帯さん」	北星晃平	37	月間日誌 (11月)
経済フォーカス	再び下降に向う日本経済—日米同時不況の可能性も	42	
海外短信	金大中大統領—南北統一の長期プラン/IT革命—日本企業の反撃/中東紛争の現状と未来	44	
本の紹介	佐和隆光著「市場経済の終焉」/鳥越皓之編「環境ボランティア・NPOの社会学」/高橋乗宣著「二〇〇一年日本経済 バブル後最悪の年になる!」/津田道夫著「君は教育勅語を知っているか」	46	
読者だより	和田龍三	48	石堂清倫氏へカンパを
			カット 藤井ハルエ

太平洋戦争の開戦記念日の一二月八日から五日間にわたり、東京・千代田区・九段会馆などで非政府組織（NGO）主催の「日本軍性奴隷制を裁く女性国際戦犯法廷」が開かれた。この法廷には、検事側証人として戦争中に日本軍の慰安婦とされた韓国、朝鮮、中国、台湾、フィリピン、インドネシア、東チモール、オランダなどから約七〇人の女性、専門家証人の国際法、憲法学者、裁判官としてG・マクドナルド氏（米国）や英国、アルゼンチン、ケニア、インドから五人、検事団は米国のパトリシア・セラーズ氏を首席検事に韓国・朝鮮の合同検事団、中国、フィリピン、インドネシア、東チモールに日本、それにマスコミ関係者、一般傍聴者など三〇カ国から連日一二〇〇人以上が参加した。

法廷は八日のセラーズ首席判事の起訴状朗読に始まった。検事は、戦争中に日本軍が女

日本軍の性暴力を

裁く国際女性戦犯法廷

性を性奴隷としたことは、当時存在した強制

労働条約、売春のための人身売買禁止条約、

奴隷化を禁止する国際慣習法、ジュネーブ条約、ハーグ陸戦条約などの国際法違反であると述べた、さらに戦時中の日本軍の強姦や慰安婦制度は「人道に対する罪」にあたり、明治憲法下で陸海軍の統帥権を持ち、最高権限を有した昭和天皇はこの残虐行為を知る立場にあり、やめさせる手段を講じるべきだったとして有罪を宣言し、さらにその行為の責任者として東條英機、松井石根、板垣征四郎ら二五人の日本軍の最高幹部を訴追した。

それから連日、検事が日本の植民地だった朝鮮、台湾、占領地区の中国やアジア各地で行われた日本軍の女性に対する強姦、強制連行、拷問、残虐行為の被害者の証人尋問を行なった。第二日目の中国側の証人の女

焦点



性たちは証言中に号泣し、失神して救急車で運ばれ証言が中止される場面が続いた。事件から七〇年近く経っても被害者の受けた肉体的・精神的打撃の深さがまざまざと示され、性奴隷制の非人間性をあらためて浮き彫りにした。第三日には、旧日本軍兵士二名が八路軍の支配地域の戦場における中国人女性に対する性暴力が上官の黙認どころか公然たる奨励の下に行われた実態を生々しく証言した。

法廷最後の一二月二二日、首席判事のG・マクドナルド氏（旧ユーゴ国際戦犯法廷前所長）が被害者の証言や専門家の意見に基づき、国際法学者らで構成された判事団の作成した「判決要旨」を読み上げ、日本軍の戦時中の強姦や慰安所制度を「人道に対する罪」と認定し、昭和天皇や軍最高幹部を有罪と宣告し、日本政府に対し、日本政府に対し被害者への謝罪と賠償を勧告したが、判決は割れるような拍手で採択された。

この判決は、日本政府が一九五一年のサンフランシスコ平和条約を口実に被害者への賠償を拒否していることを厳しく糾弾し、日本はドイツと異なり、平和条約に基づく義務である「人道に対する罪」の訴追の責任を全く放棄し、ハーグ条約に規定する市民の被害に對する国家の賠償責任を放棄していると批判した。さらにこの判決は戦後東京で行われた連合国の極東軍事裁判が大国の利害から昭和天皇の戦争責任を免責し、特に女性に対する性暴力を「人道に対する罪」として訴追することを放棄した性差別的な本質を追及し、米国その他の連合国に對し裁判資料の完全な公開を要求した。さらに日本政府に對して国家責任に基づき完全に誠実な謝罪と法的措置によって生存者に適切な保障をおこなうこと、教科書に記述し、若い世代に伝えることを勧告した。

今回の「女性国際戦犯法廷」を成功させた世界の女性パワーは、東京裁判の国家的、性差別的な限界を乗り越え、女性の尊厳を確立する大きな成果を打ち立てたといえよう。

（柴山）

ミレニアム・シンポジウム 20世紀社会主義の検証

— イタリア、ヨーロッパの経験から —

共催：東京グラムシ会・労働運動研究所

さる一月二十五日午後一時三〇分から、東京・港区六本木の大阪経済法科大学東京セミナーハウスで、東京グラムシ会・労働運動研究所の共催でセミナー「二〇世紀社会主義の検証—イタリア、ヨーロッパの経験から」が開かれた。この会議には大阪、名古屋などからの出席者を含めて、グラムシ会の会員や会報「チッタ・フツラ（未来都市）」の読者、「労働運動研究」誌の読者や労研会員など約五〇名が参加した。会議は午後六時閉会し、伊藤晃氏（東京グラムシ会）が閉会の辞を述べたが、引き続きパネラーを囲んで和やかな懇親会が行われ、午後九時に閉会した。

会議は、柴山健太郎氏（労働運動研究所）の開会の挨拶で始まり、大竹政一氏（東京グラムシ会）の司会で進行し、当日のシンポジウムのパネラーと報告テーマが紹介された。

まず植村邦氏（労働運動研究所）からの「左翼であることの共通の土台—『異なる社会のビジョン』というテーマでの報告に続き、後房雄氏（名古屋大学教授）から「イタリア共産党から左翼民主党へ—転換の理論的検証」、佐藤紘毅氏（イタリア研究者）から「イタリアの社会主義—もう一つのスタイル」、加藤哲郎氏（一橋大学教授）から「ヨーロッパ社会主義—経験と可能性」の報告が行われた。報告をめぐってパネラー相互間や参加者から活発な討論が行われたが、誌面の都合で以下に紹介するのはこの会議のパネラーの発言の収録テープを要約したものである。（文責：本誌編集部）。

なお、当日シンポジウムに出席された鈴木正氏からいただいた感想を末尾に掲載する。

開会の挨拶

労働運動研究所 柴山健太郎

最近、二〇世紀社会主義の検証の試みがさまざまな形で行われています。一九九七年一月の「グラムシ没後六〇周年記念シンポジウム」、翌一九九八年のトロツキー研究所・東京グラムシ会共催のシンポジウム「トロツキーとグラムシ」の開催、同年の社会主義理論学会編の「二〇

世紀社会主義の意味を問う」、昨一九九九年の植村氏の「イタリア共産党転換の検証」や本年の「二〇世紀社会主義」の刊行などがそれです。

これらはいずれも大きな成果ではありませんが、二〇世紀社会主義の一つの潮流であるコミンテルン潮流のなかの反スターリン主義的潮流だっ

たグラムシ、イタリア共産党、左翼民主党やトロツキーの再評価の試みにとどまっています。二〇世紀社会主義のもう一つの潮流である社会主義インターの検証の作業はまだ極めて不十分です。この作業は、社会主義インターがソ連・東欧社会主義の崩壊後も生き残ったばかりでなく、いまや五大大陸に勢力を広げ、国際自由連にも大きな影響力を持ち、欧州では特に欧州社会党が欧州連合（EU）の主導権を握っているだけに重要な政治的意義を持つています。私もドイツ社民党の研究や最近「グローバル経済とIT革命」を

刊行して、この問題に取り組んでい
ますが、日本の左翼の欧州社会民主
主義の検証への取り組みは非常に立
ち後れています。その意味で今日の

左翼であることの共通の土台

―「異なる社会のビジョン」

労働運動研究所 植村 邦

統一的左翼の提唱

共産主義運動の歴史は七〇年です
が、私はそのうちの四〇年を経験し
ました。私は昨年から二冊の本を書
きましたが、今フランス社会主義運
動について三冊目の『ジョスパン社
会党への道』を書いていきます。私は
この四〇年間、政治団体や研究団体
の一員として主としてヨーロッパ社
会主義運動の研究を担当してきまし
たが、先程柴山さんが言われたよう
に社会民主主義運動も決して忘れて
はならないと思ひ、フランス社会党
の運動について書き始めたのです。
来年初めには何らかの形で公表した
いと考えています。

私は二番目の著書『二〇世紀社会

シンポジウムを一回で終わらせずに
日本を含めた二〇世紀社会民主主義
の検証として発展させることを期待
します。

主義』で、なぜ「共産主義的な社会
主義運動が敗北したのか」というこ
とで検討すべき第一の問題として国
家・革命・民主主義、二番目に計画
経済・反市場主義、三番目に労働者
の自己経営を挙げました。こういう
反省にたち、新しい社会主義運動は
どうなるのかを考える際に、「もう社
会主義運動は断念した」という人も
いるわけですが、私は断念はしてい
ません。社会主義はやはり客観的な
要請であろうと考えております。
それでは新しい社会主義はどうな
るのかということがその次の問題に
なります。それには社会民主主義の
問題や日本共産党の科学的な社会主義
の提案もありますし、エコロジカル
社会主義などの提案もあります。そ
の中で私がどのような立場を取るか

が問われているわけです。

我々は日本にいるわけですから日
本をどうするかということと密接な
関係があります。

私はいろいろ
な社会主
義のなかから
どれが良いか
というように
論争ではなく
て、もう少し
基本的にこの
資本主義社会
をどのように
批判し、どの
ような運動を
起こして改造
していくの
か、そしてそ
の延長上に社
会主義がある
という立場か
ら統一的左翼
の運動を作っ
ていく必要が
あるだろうと
考えていま
す。ここでは
この組織論に
ついては述べ

ませんが、ごく単純に言えば個人も
団体も政党も入って議論して政策
的、綱領的な方針を作っていく運動



シンポジウムのパネル―

というように考えています。どうも我々は次第に小さいグループに分裂していった、多数派を形成するという意欲に欠けていたと思うのです。

もちろんそれぞれのグループ独自の理論的研究は必要なのですが、全体として多数派を形成して現実的に社会を変えていく、マルクスでいえば社会的・経済的構造を変えていくという運動を伴わないことには政治的運動とはいえないのではないのでしょうか。

このように組織運動に入らないで綱領的な方針を検討するために何が必要なのか、つまり今まで我々が使ってきた概念なり理論なりの問題を省いて明らかにしていった、それを反省して新しい概念構成を形成していく。その時のキーワードになるようなものを私の理解でお手もとのレジメにまとめてあります。

今度、日本共産党は規約前文を改定して前衛党とか社会主義革命とかいう言葉を削りました。規約の中に前文を入れるというやり方は一九三四年ころにソ連共産党で始まったようです。『労働運動研究』一一月号で乾さんが日本共産党規約はスターリン規約をまねて作ったといっています、私もそうだと思います。たし

か一九三四年のソ連共産党大会では、綱領を改定する時に「絶対的に正しい組織方針、活動方法を求めてはならない。我々の組織原理、活動方法は、我々が客観的情勢において提起している政策的課題、政治方針によつて決まる」というような文言で始まっていたように思います。これはロシア共産党第一〇回大会でプハーリンがいった言葉だそうです。プハーリンは後に肅正されましたが、プハーリンの名前を挙げることなく、彼の文言だけが残っていたわけです。私もこの定式は正しいと思います。組織方針の方から入るのはあまり生産的ではないし、まず政治方針から議論してそこからそれにふさわしい組織原理、活動方法を決めていくというやり方の方が正しい。ただし歴史を見ますと、ある程度逆な面があるわけで、組織方針なり活動方法の実践が政策の正しい追求を妨げるという面があり、この文言にはこういうことを戒める意味があったのだと思います。

レジメに挙げた概念の批判なり反省なりは私が考えたことであって、私がこういうことを批判しながら左翼に参加してきたわけです。このレジメのなかに歴史的経験の検証とし

て、フランスの一九三六年の人民戦線、一九八一年の社共共同政府綱領、一九九七年の「多元的左翼」、イタリアの一九四七年の共和国憲法に至るレジスタンス、一九七六年の国民連帯政府、一九八九年の転換などを参照します。歴史的経験といつても現在の経験—例えばユーゴ軍事侵攻、ユーゴ内の独裁と民族的対立（人道主義）、ユーゴ対西欧（ジェオポリテイクス）、資本主義諸国の抗争（EU対米国）などの問題に対して左翼がいかなる態度をとるのか、いかなる政策を取るのかなどの問題もあります。

例えば最近岩波の『世界』一一月号に発表されている「ポスト団塊の世代」の提言などを左翼が自分のものとし提案や政治的方針を打ち出すことができるのか、こういうことを考えながらいけばもっと話が具体的になるのだらうと思います。

実現された歴史的社会主义の批判

以上のことを前提にして本題に入ります。

まず第一は社会主义の問題です。マルクスの時代から社会主义に幾つ

かの形態があったと思いますが、ここで対象にしているのは実現された歴史的社会主义（国家と共産主義運動）の批判です。次は革命という概念、革命という行動とは何であったか、ということだと思います。理論的にはレーニンの『国家と革命』の基本的立場がコミンテルンの立場だったのですが、その後に出てくるもう少し具体的な戦略・戦術として武力型革命や蜂起、マッセン・ストライキという言葉が経験した時代にもありました。武力革命を資本主義国で考えていたグループもあつたし、マッセンストライキということも一九六八年のフランスの五月で叫ばれました。これは一撃的な権力の掌握をめざす革命形式だと思ふのですが、これと異なる「過程革命」—これは私の考えた言葉です—の提案があります。資本主義から社会主义への移行の問題を再吟味して、そういう「一撃的な権力掌握」ではなく、過程としての革命という仮説を対置したのが第二インターだといえます。

第二インターを一般的に取り上げるのは難しいのでフランス社会党を考えてみたいというのが今書いています、ベルンシュタインや第

二インターと少し違いますが、やはり「過程革命」の仮説はイタリア共産党のいう意味での「第三の道」です。

フランスでは一九九七年に「多元的左翼」政権ができません。この性格は今フランスで議論になっているのですが、一九三六年の人民戦線から一九八一年の共同綱領政府を通じて現在のジョスパン政権ができません。

この間にいかなる議論があったかという事です。一九三六年ころはまだベルンシュタインの余波が残っていた時代ですが、フランス社会党はベルンシュタインをあまり評価していませんでした。フランス社会党は自分では「ジョレスとレオン・ブルームの伝統に基づく」という言い方をしていますが、いろいろな考え方があって現在のジョスパン政権になったわけです。私は、この過程を研究してみる価値があるだろうと思っ

ているのです。イタリアはフランス社会主義と対比してみますと、一九四七年のイタリア共和国憲法に至るイタリアのレジスタンスが特別な意味を持っていたらと思うます。イタリアの「社会主義への民主主義の道」はレジスタンスの経験に発端を持っています。

す。それから一九六七年の国民連帯政府ができ、これは一時的な挫折を経て一九八九年の転換に至るので、この過程をフランスとイタリアで対比するとどうなるのか。

この過程をフランスで見ますと、ベルンシュタインの後、一九三六年に実際に人民戦線政府ができます。この時、共産党なり、社会党なりが政府に入るということ、つまり左翼政党が政権に就くことと権力の掌握との関係はどういうことになるのか、ということが議論されているのです。この議論のあり方が現在のジョスパン政権までつながっているといえます。時間の関係で議論の中身を紹介することはできませんが問題点だけ述べます。

国家を支配階級が自由に動かすことができる用具・器具という見方が私の時代の共産主義運動の主流だったのですが、その理論はマルクスやレーニンから導かれていたのです。その後マルクスのヘーゲル法哲学批判が一九二〇年代ころから次第に知られるようになりましたが、これはレーニンが知らなかった時代です。マルクスが後年パリ・コミューンで述べたような極めて実践的な提案というものが、必ずしも彼の思想全

体を意味したものではなさそうだと、いう解釈が出てきたのです。これは私の『二〇世紀社会主義』第二章に書いてあります。つまり、その当時にマルクスのヘーゲル法哲学批判を研究し直してここから新しい結論を導くという作業を試みた人たちがいたということです。この人たちの考えが政策の表面にも現れたように思います。

レーニンの理論では国家を外から粉砕するというようにうけとられていたのですが、そうではなくて国家を内部から改造していくという理論が生まれてきたわけです。グラムシの「社会による国家の再吸収」という考え方も、そうした理論として位置づけることができます。特に民主主義の意義を論ずるにはこの観点が必要だろ

うと思います。国家を外部から粉砕するという理論では、民主主義は便宜的に使われ、民主主義に普遍的な意義を見いだすことができないだろうと思

います。第二はこの資本主義の批判ですが、これは私の本の第一章の「マルクス主義は今日の第一の課題か」でアミンの考え方を紹介しました。それは資本主義批判を一般的な資本主義批判としてでなく、今我々が生き

ていてこの資本主義、つまり現代社会の批判から出発しなければならぬという事です。

グローバリゼーションをいかに統御するか

こういうふうに見ますと、今日の資本主義的世界、グローバル市場が対象になりますが、一九八九年の時代はアメリカ経済も非常に危なかった時代です。その時にグローバル化を利用したのです。グローバル化は客観的な傾向でもありますが、アメリカはソ連が崩壊して経済がグローバルになる過程を巧みに利用したわけです。そこでグローバリゼーションが統御可能な

のか否か、もう統御できないのかという議論があります。我々の運動の方がむしろ統御しようとしなかったのではないのでしょうか。一九八九年以降、社会民主主義を含めてグローバリゼーションは統御できないからこれに適応しろという理論が多くなつたように思

います。例えば投機的金融の流れを統御する提言として「トービン税」(注1)が提案されたのは一九七〇年代です。ジョージ・ソロスも九〇年代初めにはそういうことをいっ

ていた

ています。最近ですと、シアトルの会議での反グローバリゼーション勢力の結集は左翼の運動の可能な道を示していると思えます。

次の問題は今日の社会的不平等です。これは日本の場合では、最近非常に顕著になってきました。橋木氏の「ジニ係数」(注2)や佐藤俊樹氏の「SSM」(注3)などが岩波のいろいろな出版物や「世界」などで発表されています。「世界」一二月号では佐藤学氏が「階層的視点なき教育改革と実態」という論文で「教育による階層分化が以前にまして明瞭になりつつある」「社会階層による教育の不平等の拡大」について述べて注目されています。以前ですと左翼の経済学者や教育学者からこういう主張がなされたものです。社会的現象としてこういうことが今日問題になっているということなのです。

どうもアメリカの情報が我々に届く時には株が高くて景気がいいという類の話しか入ってきません。アメリカでは左翼といわないで自由主義的経済学者といいますが、その人たちの研究はあまり入ってこない。一九九七年にW・ウォルマンとA・コラモスカという学者のアメリカ資本主義における労働の研究で「ユダの

経済資本はいかにして労働の犠牲の上に繁栄するのか」という本が出版されています。彼は労働のフレキシビリティがいかなる結果をもたらしたかを細かいデータを挙げて所得とか資産などの変動、それに株価やGDPの関係で証明しています。これは九〇年代前半の話でこれ以降に変わったのかどうかかわらないのですが、資本主義がいかに労働をもてあます状態になっているのかを書いているのです。こういう認識がヨーロッパの社会民主主義では、おおむね共通の認識のようです。

資本主義と労働との関係についていえばヨーロッパとアメリカは別なのだと認識は共通していると思えます。これは経済的目的、社会的価値というものがヨーロッパではまず雇用を確保するという観点が強いのに対して、アングロサクソンでは企業利潤の確保が第一という社会的価値の対立が現れているように思えます。この社会的価値が先程不平等のところでもいいましたように、階層的視点とか階層分化と結びつけてみると左翼というものがどういう社会的価値にたつのかということが明らかになると思えます。

その次は市場の機能が非常に問題

になっていまして、フランスでは「パense・ユニク」の議論があります。これは単一の思想というような意味ですが、これは市場が絶対的に適合すべき基準というような考え方を意味します。その議論のなかで社会を国家の領域、あるいは国家が介入する領域と市場に委ねる領域の二つに分ける「二分説」がいろいろなところに出てくるのです。第三セクターというのはNPOのように国家的統制に服しない領域の一つですが、こういう領域を発展させようと主張がでています。これが労働とどういう関係にあるのかが問題になります。フランスでは第三セクターは多くの場合国家的補助を受けていますが「補助」と社会的生活における労働とがどういう関係にあるのか、もうすこ

し経済を多元的に考え、現在の資本主義社会とは異なる社会を構想しようという考え方が出てきているのです。

注1 トービン税 七二年にアメリカのノーベル賞経済学者のJ・トービンが、投機的な資本移動を抑制するための課税を提案した。ヨーロッパでは、この基本的な視点を今日の世界で現実化するため議論が行われている。

注2 ジニ係数 社会的不平等を表す統計的数値で、〇から一の間の数値をとり、数値の大きい程不平等が強いことを示す。

注3 SSM 社会階層と社会移動の統計的データ(を用いた分析)。

民主主義と両立する左翼

—— イタリアと日本における左翼の自己刷新 ——

名古屋大学 後 房雄

私は一九八九年にイタリア留学の機会を得てローマに二年間滞在しました。当時は東欧革命の真最中でイタリアでは共産党が左翼民主

党に転換する過程で、賛否両論が闊わされてる渦中でした。イタリア政治や共産党周辺ではいろいろな動向がありましたので、現代政治の動き

を密接に体験することになりました。そして、九一年に帰国した直後の日本の政治には余り大きな動きはなかったのですが、九二年に日本新党ができたところから政治にも変化が出始めたので、日本とイタリアの現代政治を比較しながらフォローしてきたのです。この間にイタリアに生まれた政治過程を、「大転換→イタリア共産党から左翼民主党へ」「オリーブの木」政権戦略、「ピエトロ・イングラオ自伝」「イタリア共産党を変えた男」などの本で紹介しましたので、お読み頂ければ幸いです。

いま日本共産党自体の変化が政治的事実として重要であろうと考えますので、それにつなげる形でイタリアの話をつくつか述べたいと思います。西側の共産党を見た時にある程度の政治勢力になった国はイタリア、フランス、日本、スペインくらいです。この四カ国がいまどうなっているかという点、イタリア左翼民主党は社会主義インターに加盟して社会民主主義政党になっています。フランス共産党は与党になっています。多元的左翼の一角を占め、スペインは今年の春の総選挙で一九三〇年代の人民戦線以来初めて社会労働党と共産党が選挙協定を結び、連合して

選挙に臨みました。西側先進国の共産党は事実上「民主主義ゲーム」の中に入ったといえます。日本共産党はこの動きに立ち遅れていたのですが、最近になって曲がりなりにも同じ土俵に乗ることになったわけですから。

この意味で共産党という政党の一種の総決算が行われているといってもいいのではないのでしょうか。イタリア共産党は特異な共産党だとは思いますが、もともと国際共産主義運動の中では一種の異端として問題提起を続けてきた存在で、一九七〇年代以降には社会主義インター、特にブランドのドイツ社民党とはかなり密接な関係があり、共産主義運動と社会民主主義の流れの境界線あたりに位置していたといえます。党内にかなりはつきりした社会民主主義的グループが存在していました。それが最終的に一九八九年の「ベルリンの壁」の崩壊以降、名前を左翼民主党と改称してほぼ全面的に共産党ではない左翼政党に意識的に転換したわけですから。東欧諸国で政権党であった共産党が完全に市民の打倒の対象となり自己破産して名称を社会民主党に変えたのと異なると、イタリアでは内発的に転換したという特殊な

経過をたどったのです。

スペインやフランス、ある意味では日本共産党も同じような経過をたどっているといってもいいのですが、これらの共産党はどこが間違っていたからどう変えるということをはなして議論をして変わるのではなく、ごまかしながら変わっているわけですから。それと比較すると、イタリアは党内民主主義を前提にして内発的に変わっていったという意味では空前絶後の共産党といえます。

転換過程での三つの側面

そのイタリア共産党の転換の過程で重要と思われる三つの側面を指摘しますと、第一は先程植村さんが言われた現代社会認識にかかわる部分です。イタリア共産党が最終的に変わっていく契機は社会主義の崩壊から冷戦の終結であったわけですが、八〇年代のベルリンゲル時代の後期からすでに本格的な転換の準備がされていきました。むしろ転換する最終的なタイミングを図っていたという感じがあります。八九年六月に踏み切るかという議論もあったようですがそれはやめて「ベルリンの壁」崩壊を待って踏み切ったというのが実

情のようです。一九八〇年代に、ユーロコミュニズムが終わって、イタリア共産党のことが日本でもあまり報道されなくなった時期があります。イタリア共産党は七六年に国民的連帯政府の方針を出して閣外協力までいくのですが、それが挫折してまた左翼路線にいったん戻ります。日本共産党も一時ユーロコミュニズム的になっていったのが、八〇年前後に社会党との関係が決裂して完全な孤立化路線に入っていきます。

私もその間の経緯は良く知らなかったのですが、イタリアに行ってみると、やはり八〇年代にいろんな自己改革のための準備作業がかなり大掛かりになされており、それが八九年前後の転換につながっているということになります。

ベルリンゲル時代にエコロジやフェミニズムなどに対するスタンスがかなり開かれてきて、党内に女性党員のグループが形成されました。原発についても八六年の大会で原発反対の決議が数票差で否決はされましたが、その直後にチェルノブイリ事故があつて原発政策が完全に転換しました。そういう中でマルクス主義に対するスタンスもかなり変わりましたし、同時にグラムシに対する

スタンスも変化してきました。

私自身はグラムシ研究から入りました。イタリアでもある時期まではかなりストレートにグラムシの議論からその時代の政治的方針を引き出してきているというタイプの議論が多かったわけですね。八七年のグラムシ没後五〇周年の研究集会の時には「グラムシを越えて、グラムシとともに」というスローガンが掲げられたわけですが、グラムシは「フォード主義」「アメリカニズム」という議論をしていますから、ある意味で高度成長期までは予見していたといえます。だが「ポスト・フォード主義」の段階になってきた場合、グラムシから直接に答が出てくるというような議論はほとんど意味がないわけです。当時のイタリアではグラムシの方法論は参考にはするが、グラムシから何か具体的な結論を引き出して政治方針にするということは完全になくなっていったといつてよいだろうと思います。その意味で当時のイタリア共産党では「自分たちの理論的根拠自体の根本的な問い直しをする必要がある」という議論がされ始めました。

その転換の過程でいくつか印象的な議論がありました。八九年一月

に当時のオツケット書記長が新しい左翼政党を作るといふ提案をした時に八〇年代の一〇年間についてこういう言い方をしています。

「我々は最近一〇年間の巨大な変化が諸階級、諸階層のアイデンティティや社会体制を解体し再編成することによって、要求や消費の優先順位を変化させることによって、かつてない諸矛盾を成熟させることによって、そして新しい諸主体や諸権力を登場させることによって、現代社会の相貌や輪郭やアイデンティティを作り替えたことを見ないわけには行かない。まさに左翼の基本的理念、実践的経験、文化の大部分が現実の過程から立ち遅れてしまったが故に、左翼はしばしばこの大変化を防衛的な態度で眺めてきたということとをみないわけにはいかない。」

こうして八〇年代の急速な変化に対して左翼が完全に立ち遅れたという認識をしたわけですね。日本でも八〇年代は中曽根政権時代で国鉄の分割民営化があり、行政改革が行われた時代だったので、私たちは最初は直感的に反動的なものだと思っていたのです。しかし、今の時点まで引き伸ばして考えると、もちろん反動的側面はありますが、その中に

新しいものを生み出そうとしている部分は明らかにあったのだらうと思えます。

だから一九八六年の衆参両院ダブル選挙の結果に見られるように有権者も支持し自民党が大勝したのだと思います。「自民党がうまく有権者をグマシしたのだ」という議論が今も昔もありませんが、その程度のことではあんなに大きな選挙結果の説明はつきません。

その当時の日本の旧革新勢力はまさに「〇〇反対」「〇〇を守れ」というような防衛的な態度の対応に終始していたわけですね。他方、中曽根は終始「改革」を主張し続けていたわけですから、改革の立場が完全に逆転し左翼勢力の方が「守旧派」になっていたのです。これはその後ますますハッキリしてきて、時代や現代社会の変化の方向と左翼の認識がかなり根本的にズレているという認識が多くなっている間に強まっていったように思います。そういうことをイタリア共産党は理論化し、言葉で表したのです。

新自由主義の「小さな政府」というスローガンがありますが、これについて九五年の左翼民主党の政策大会で当時のダレーマ書記長は次のよ

うに述べました。

「サッチャー、レーガン、ペルルスコーニなどが勝利したのはやはり社会的ニーズに応えることができたためである。左翼はそれにただ反対しただけなので単なる「守旧派」と見られている。その新自由主義的改革が求められてきているということを前提にして左翼に求められているのは新しい自由主義的改革のイメージを打ち出すことであり、単に新自由主義的改革に賛成か、反対かということでは左翼は負け続けるだろう。サッチャー型でない新しい自由主義的改革の構想を左翼が打ち出せないで勝てない。」

左翼民主党があえて民主主義革命でなく、自由主義革命というテーゼを掲げたことで、従来の左翼の大きな政府志向のイメージがかなり変わってきたという認識が浸透して、九六年の総選挙で勝利したのです。

現代社会認識の見直し

日本でも市場主義、新自由主義という形でいろいろな改革が進んでいる時に福祉国家を守ろうという言い方で政治的提案をする立場があるわけですが、そういう防衛的態度では

勝てないと思います。自由主義的改革が支持される根拠を踏まえたくえで新しい提案を行わないで、何かフアシズム前夜であるかのように人民戦線とか福祉国家を掲げれば幅が広がるというような発想は時代認識が全く違います。

そういう意味でイタリア共産党の現代社会認識にかなり根本的な見直しがあつたというのは印象深かったのです。これを象徴するのがイタリア共産党が小選挙区制の推進の側に転換したことです。イタリアはもとも完全比例代表制できて左翼の側もこの制度を支持してきましたが、それが八六年の党大会の直前の「エスプレッソ」という週刊誌のインタビューでイングラオが「もしイタリア共産党が真剣に政権を取ろうとするならば小選挙区制を考えるべきだ」という発言をしました。その後、オツケット書記長時代になって、それが正式の方針になったわけです。それで最終的には九三年の国民投票を経て上院、下院ともに比例制二五%、小選挙区制七五%の選挙制度に転換したのです。

たつても政権はとれません。だからイタリア共産党にとっては、小選挙区制で勝負する以外に政権につく方法がないというのが基本的な発想だつたと思います。しかも共産党単独では選挙に勝てないとすれば、他の政党との連合能力を高めることが不可欠になります。要するに政権に挑戦するという意識がこの小選挙区制への転換にこめられているのです。つまり選挙制度の問題は民主主義のタイプを変えるものであつても、民主主義そのものを危うくするものではないということであろうという転換をしたのです。

党内民主主義と異論の公開

党内民主主義の問題で言えば、私が翻訳したイングラオの自伝にこの経過が当事者自身の口から詳しく語られています。イタリア共産党も民主集中制をとっていたのが最終的に党内民主主義を確立するところまであつたわけですが、最後に第一九回大会、第二〇回大会では全国議案が三つ提出されました。これは中央委員が一人でも参画していれば全国議案として認め、それらのグループに

は同じ広さの部屋でファックスや電話も与えて、各支部の討論にはどの議案グループからも代表者を派遣して説明でき、しかも最終的には各支部大会で比例代表制で各議案に投票して次期指導部と代議員を選ぶようにしました。他の政党でもおそらくここまですべて徹底したところはなんでしょうから「イタリア共産党には党内民主主義はない」などということは誰も言えなくなつたわけです。

ここまで党内民主主義を徹底できた決定的な突破口は異論の公開だろうと思います。これは一九六六年の第一一回党大会でイングラオが直接大会の壇上から発言し、「党内のみんなの意見を聞いて方針を作るといふが、何が指導部の中の論点なのか、いかなる意見といかなる意見が対立しているのかということを知ることなしに、一般の党員が発言できるわけがない。自分も指導部の一員としていろいろな異論を出しているが、この異論を外部に公開することを認めるべきだ」と主張したわけです。結果として彼の意見は採用されなかつたのですが、イングラオが指導部から排除されなかつたために、異論の公開が実現してしまふのです。

それに対してアメンドラやナポリターノという右派が形成され、それをベルリンゲルがまとめるような形になり、党内に三つの派が形成されるわけです。そういう経過があるのでもイタリア共産党の転換に際しても最終的にはそれぞれの議案を提案して比例代表制で決着をつけるような形になつたわけです。

日本共産党の転換については時間がありませんので簡単に述べますが、規約改定といつても規約の原理はまったく変わっていません。新規約第五条には「党の決定に反する意見を、勝手に発表することはしない」という規定があります。この規定がある限り一般党員には何が論点なのか全くわかりませんから議論のしようがないと思います。今回の大会をめぐる討論をインターネットなどでやっているわけですが、それを見てみると党内民主主義を要求している人たちは左からというか、従来の路線を守れという人たちで、今の路線は良いからこれまでの路線をキチンと自己批判して変えなさいという人たちからは党内民主主義の要求は全くないという非常にいびつな変わり方なわけです。おそらく路線的には社会民主主義的な方向に変わるしか

ないと思いますが、構想力があるのはどうやら委員長だけであって他の人たちは従来の路線を守ることを要求し、そこが意見を言わせろといっているわけです。そこで委員長が強引に意見を通すというやり方をして

イタリアの社会主義

——もう一つのスタイル——

イタリア研究者 佐藤紘毅

いるのが日本の共産党の今のやり方です。私自身はそういう変わり方であつても、変わらないよりましと考へていますが、非常に不幸な変わりかただということは否めないと思ひます。

私は政治的出自からいうと植村さんに近いわけで、六〇年安保闘争当時は高校生でデモに参加したのが運のつきで、それからは教育大自治会に入り浸るようになり、この会議におられる林さんや伊藤さんたちの指導を受けました。六一年には共産党に入党届けを出す寸前までいったのですが、「やめとけ」と止められました。それから共産党や民青にいじめられたものですから、共産党という

ら「マニフェスト」派が分裂した時には歓喜しまして、「現代の理論」誌の編集長の安東仁兵衛さんに褒められたり叱られたりしながら、一生懸命に「マニフェスト」論文を翻訳した時代がありました。

どうも左翼にはラディカルな立場の方に価値をおく傾向があります。私が、私も六九年にイタリア共産党か

私は一九七一年にイタリアに行き、二年間スクーター工場で働いた経験があり、七五～六年にはイタリア留学が認められて一年間イタリア社会主義運動史を勉強しました。その時の先生がルチアーノ・カファアーニヤという教授でしたが、この人は共産党員でしたがハンガリー事件で離党して、一時イタリア社会党の機関誌「モンド・オペライオ」で協力していました。

私がおもひます。私が、私も六九年にイタリア共産党か

私が留学していた七五～六〇年ころ、この「モンド・オペライオ」誌上でイタリア共産党批判が始まったわけです。その時の中心人物がN・ポッピオやL・コツレット、M・サルバドリーたちでいずれも国際的知識人でした。当時ポッピオは民主主義論を展開しましたが、これは間接的なイタリア共産党批判でした。コツレットは五〇～六〇年代まではイタリア共産党に近い立場にいま

転じました。その頃、私はコツレットイが書いた論文の中で「資本や市場というものは廃止できるものではない」と述べているのを読み、私はこの点があいまいだったので感銘を受けたことを覚えています。サルバドリーも社会主義国の中で少数派の問題を取り上げ、現存社会主義批判を行っていました。

彼らの批判の最大の問題は、ソ連・東欧などの現存社会主義とイタリア共産党は無縁ではなく、むしろ歴史的にも思想的にも非常に近い組織だということでした。私は一七歳のころから「イタリア共産党万歳」で育つてきましたから、こうした批判に一種のカルチャー・ショックを受けましたが、新しい論点を与えられたと思ひました。

後さんは、さきほど八〇年代のイタリア共産党の転換の動きを内発的のものといわれました。たしかにフランスやスペインのユーロコミュニズムへの転換に比べればイタリア共産党は内発的かもしれませんが、その内発性の中身が問題だと思ひます。

批判の論陣を張った知識人

ハンガリー事件でイタリア共産党から相当数の離党者がでましたが、その人たちの一部はイタリア社会党に入党して、社会党内で知的にかなり重要な地位を占めるようになりました。アントニオ・ジョリッティもその一人でしたが、私もトリアッティのジョリッティ批判を読んで彼を悪党だと思っていました。ところが六〇年代初めに、キリスト教民主党が長らく野党の立場にいたイタリア社会党を政権に抱き込み、第一次中道左派内閣が発足しましたが、この頃から私のジョリッティ観に変化が生じ始めました。この時にジョリッティは大きな役割を演じ、電力産業国有化や産業民主化、さらには中央省庁の経済プレーン育成に力を入

れましたが、この時のジョリッテイ論文を読み彼を見直したわけです。さらに私の留学中の先生のルチアーノ・カファーニアも厳しい現存社会主義の批判を展開し、イタリア共産党の民主化と転換に刺激を与えました。

現在の日本の状況と一九七〇年代以降のイタリア共産党の転換の過程

ヨーロッパ社会主義

—— 経験と可能性 ——

一橋大学 加藤哲郎

本流は第二インター

私の意見は、二〇世紀社会主義の本流は第二インターであったということを確認すべきだということだ。これは特にヨーロッパを取り上げれば明白であって、共産党はほとんどが社会民主主義政党から生まれています。ソ連のポリシエビキ党ですら第二インター系のロシア社会民主労働党から生まれています。フランス革命の自由・平等・友愛の理想を実現するために、労働者階級に依

をみて痛感するのは、左翼の中での公然たる批判がいかに重要かということだ。なまぬるい批判はダメです。批判はもつと公然ともつと卒直に、しかも真正面から執拗に行わなければならぬと思います。影響力の強いマスコミも利用して、もつと人の目を引くところで論争する必要があるのではないのでしょうか。

抛し、プロレタリア独裁を達成しなければならぬが、それには前衛党が不可欠であり、その前衛党は民主集中制の原理に基づいて組織されねばならない、という考え方をテーゼ化したのが第三インターです。

ヨーロッパの共産党は、ほとんどが社会民主主義政党の分派として形成され、一九一九年にコミンテルンが結成された時に、その分派が党として自立したのです。その流れからいうと、世紀末の現状は分派だった共産党が再び社会民主主義の本流に戻ってきたということだ。

私もかつては、アジアや日本の共産党だけはヨーロッパとは違うということを書いたことがあります。その当時の私は、日本の場合には社会党は日本共産党が結成される以前には存在せず、むしろ共産党内の分派として労働派が生まれ、それに基づいて社会党が結成されたという意見でした。そのために社会党は常に共産党に対してコンプレックスを抱き

続け、急進左派勢力が力を持ち、社会主義の旗を捨て切れないと、私は考えていました。これはなぜ社会党内で社会主義協会派のような左派が強いのかということの分析には有効でした。しかし最近私は、日本でも実はヨーロッパと同じようなことがあったという事実を発見しました。

それはここ五年ばかり、私はモスクワの旧マルクス・レーニン主義研究所史料館に通ってきたのですが、ソ連崩壊後にここからいっばい文献が出てきました。当時は日本共産党の誕生に関する記録は、すべてモスクワに報告されています。それによると、日本共産党も実は荒畑寒村、堺利彦、山川均が中心になって作られ、綱領もこの三人が作り、一九二二年九月に綱領が作成されています。今の共産党の公式党史では七月

一五日に創立となっていますが、これはこの日にもたまたま会議があったというだけです。結党時の委員長も公式党史では堺利彦となっていますが、モスクワに送られた記録では総務幹事（ゼネラル・セクレタリ）は荒畑寒村で、堺は国際幹事という日本語で書かれた記録が残っています。

今の公式党史のベースは、徳田球一の一九三〇年の獄中尋問調書ですが、事実上は、一九二〇年に社会民主主義者中心の日本社会主義同盟が創られ、その中にロシアのポリシエビキを支持する分派が生まれ、それから共産党が生まれたのです。しかしその共産党も数年で崩壊し、逮捕・投獄された獄中一八年の徳田が中心

になって戦後共産党が再建されました。この当時、社会党系の党員は逮捕を免れるか、逮捕されても短期間だった、「転向」して戦争に協力したために共産党から厳しく批判され、それが戦後の運動の中で社会党が共産党に対してコンプレックスを抱き続ける原因になったのです。

社会主義の三つの発展段階

このように考えると、ヨーロッパ、

日本を含めて―ただしその他のアジア諸国は社会民主主義そのものが存在しなかったもので別ですが―基本的に二〇世紀社会主義とは社会民主主義であって、その中の共産主義分派が一九一七年から七〇年以上にわたり優勢を誇ったが一九八九年に崩壊し、まだ力がある勢力は社会民主主義に戻っていったということが出来ます。

この意味で二〇世紀社会主義の本流は、ベルンシュタインとカウツキーだったのです。ただしベルンシュタインで一貫していたのかという問題はあります。実は社会民主主義そのものが、二〇世紀には三つくらいの段階を経て転換しているのです。

第一段階は、第二インターの結成から始まり、ドイツ社民党(SPD)のエルフルト綱領を経て、一九一四年―一九一八年の第一次世界大戦をさみ社会主義インターのフランクフルト宣言(一九五一年)あるいはSPDのバート・ゴードスベルク綱領(一九五九年)に至る時期です。これは、労働者階級を基盤として国家権力に加わるにより労働者階級の利益を実現するという理論です。二〇世紀前半の社会主義は、こ

の路線を社会民主主義とロシア革命後の共産主義で争っていたといえます。

しかし、一九五〇年代から一九九〇年ころまでに、こうした状況が大きく変わります。社会民主主義の流れからいうと、一九八九年の社会主義インターのストックホルム宣言やSPDのベルリン綱領までの流れです。この段階では、ケインズ主義的福祉国家の路線が主流になります。スウェーデンが典型的ですが、労働者階級の利益を実現するために社民政党が政権に入り福祉国家を実現していきますが、この過程で階級政党ではなくて―SPDのゴードスベルク綱領が典型ですが―国民党に転化します。最近の日本共産党は、それから四〇年経って、ゴードスベルク綱領の段階にたどり着いたわけです。

そしていま、社会民主主義は第三段階に入りつつあります。この段階の主流は、新しい社会民主主義といわれるイギリス労働党のブレアの「第三の道」です。左翼の中にはブレアを「ズボンをはいたサッチャリズム」と批判する議論もありますが、ヨーロッパの社会民主主義政党はEU一五カ国中の一二カ国で政権に参

加しています。イタリア共産党から転換した左翼民主党も社会主義インターに参加しましたが、ヨーロッパ社会民主主義といっても、その中身は千差万別です。

新しいガバナンスの追求

この第三段階の社会民主主義と第二段階の社会民主主義との関係でいうと、問題は二つあります。第一はガバナンスの問題です。これは日本語に訳せば統治ですが、従来のガバメント(政府)、ステート(国家)の統治とは異なる概念です。

二〇世紀の世界では国民国家が支配的であったために、社会主義政党も国家権力を得るために一生懸命やってきましたが、現在の統治は企業の中にもありますし、EUのような国際的共同体もあるし、ローカルな分野もあります。こうした統治の全体をガバナンスといいます。その観点でいうと、いままでの社会民主主義はナショナルなガバナンスに集中し、そこに加わって特定の階級、階層の利益をも代表してきましたが、もはやそれではやっていけなくなってきたのです。その意味で、従来のように国家権力への参加だけで

は駄目だということになってきました。

第二は、アイデンティティ・ポリリティックスの問題です。従来の社会主義では社会主義の達成の主力を労働者階級に求めました。その基礎には中間層が分解・没落して労働者階級が増え続けるという分析があったわけですが、ベルンシュタインが先駆的に批判したように、そうはならなかったのです。

ベルリン綱領以降の段階では、市場のグローバル化と情報化を前提として、かつてのフランス革命の自由・平等・友愛のスローガンに代えて、自由・公正・連帯という新しいアイデンティティを実現していく基盤をどこに求めるかということです。それはかつては階級でしたが、現在は確実に個人(インディビジュアル)ないし市民(シチズン)であり、その個人をいかにして運動に参加させるのかということです。

ところがこの段階になって日本共産党は四〇年遅れてようやく国民党だといいたのです。しかもこれは非常にナショナル・アイデンティティの濃い政党になりそうです。これは日の丸・君が代や自衛隊の利用の容認などの政策的な展開にも現

れています。

その意味で、先程後さんはイタリア共産党から学ぶべきものはないといいましたが、私たちはナシヨナリズムを脱却して社会主義インターに加入したイタリア共産党から大いに学ぶ必要があります。

これからの社会主義は多元的で、さまざまな入口のどこからでも入れるような社会主義でなくてはならないと思います。敢えて言えば、フラン

ス革命後にプロレタリアこそが次の

世界の担い手だと発見したという意味では、グラムシのいうサバルタンつまり世界的な情報化やグローバル化の下で虐げられた最下層の人々をどのように救うかという問題に社会主義は直面します。また第三世界や旧植民地の人びと、二〇世紀によく向上の道をたどったが、いまだに虐げられている女性たちが、新しい担い手となるかもしれません。

見るべきものは見た その上で

——「労研」と「東京グラムシ会」共催のシンポに出ての雑感——

思想史家 鈴木正

かみ合っていた問題意識

本誌(三二五号、〇〇・三)に「トロッキーとグラムシ—歴史と知の交差点—」をかけた縁で、片桐薫さんか柴山健太郎さんの好意で案内をくださったのだと思う。「二〇世紀社会主義の検証—イタリア、ヨーロッパの経験から—」というタイトルに興味をもってたので出てみようとした。

話を聞くまでは外国の経験や理論的達成を耳学問で勉強できれば幸いだ、もっぱら受容的な姿勢で聞き耳を立てた。トップバッターの植村邦氏の報告を聴いている途中から受け止め方が一変した。それはなぜソ連が崩壊したか、一九一七年以降に実現されたソ連型社会主義がなぜ敗北し、歴史的存在と化したか、それをマルクス主義運動を担った主体の立場で反省して、改めて日本をどうするかという態度で語られたからで

ある。さらにその前提に立つて個人も集団も一律に加わる「統一左翼」の問題を提言されたからである。このまだ熟しているとは思えない発言は、準備された細目にわたる参考文献を要約したレジュメの全体よりも、はるかに課題のテーマである「左翼であることの共通の土台」を探ろうとするホンネと肉声がにじみ出ていると思った。

その点では後房雄氏という「民主主義と両立する左翼」の自己刷新という問題意識とも連携プレイできる提言である。統一的左翼のイメージはまだ漠然としているが、加藤哲郎氏のいう、もともと社民から共産党が分化したという立場でわずかにふられた一九二〇年に堺利彦らが大同団結をよびかけた「日本社会主義者同盟」(二〇・一二・九結成、一一・五・二八解散命令)、そして山川均らの「民主人民戦線」(四六・四・四七・五)による全左翼への訴えが私の脳裏に浮んだ。どれも不発や空中分解に近い失敗に終わっている。

二〇世紀の社会主義運動はアナ系が衰退し、共産系と社民系で勢力を二分していた。なかでも共産系は一九一七年のロシア革命で輝き、その後圧倒的な力をもって文化の領域に

も影響力があった。プロレタリア文学から映画・演劇・美術・科学にいたる活動が、それを物語っている。だが民主集中制による分派の禁止の延長線上に制度化された一党独裁および軍事路線で、資本主義と市民社会が一定程度に成熟した先進国では既存の共産党の戦略は無効を宣言された。この機会に歴史の上で先行した社民系がエンゲルス時代の原点に立ち帰り、世界史の変化を読んだべルンシュタインやグラムシの理論を生かし、共産系と共同して、統一的左翼を形成することは有意義だろう。問題はその手順・方法で、いかに現存の勢力の首に鈴をつけるかだ。失敗したと思っていない党派もあることだから——

日本のことに限っていうなら、この統一左翼には二つの可能性がある。一つは政党で議会において一定の地歩を占める政治勢力として結果する組織(後氏が解説し、そして支持するイタリア左翼民主党とそれとプロック)が考えられる。もう一つは、究極的に人間疎外の克服が完成する未来の共産主義理想社会まで展望した思想集団—人間の全体的解放を直観した知の共同体(私見では、その実現は不可能で、塞の河原で石

を積むように、積んでも積んでも崩れる。それでも積む無窮道の楽天的行為の過程のみが革命として実在する)が考えられる。この二つは分離して作ったほうがいい。

後者は例えば江戸時代の思想家・安藤昌益が百年の後を期して思想的に語りかけたように現実の政治的執行権力とは独立して理念をよびかける。それはどんなに少数でも、それが人間の精神的境位の最前線を取っているものなら、その普遍性は人々の心に浸透していつかは必ず公論となって歴史に実現されるだろう。そのことを人類の思想史はわれわれに告げている。この優れた意味での前衛的機能をめざす思想集団は真の世界観的党派である。共産党を「世界観政党」化する考え方は、権力行使して性急に人びとをイデオロギー的に強制し統制支配する点で、これと根本的にちがっている。

ところが前者は民衆の投票行動によつて生命を左右される。その共鳴を得るよう優先順位のついた一定の政策を掲げる政党・政派にまともななければならない。前衛的機能よりも大衆の動向を感じた現実的機能を発揮して目前の選挙民の票を「我田引水」しなければならない。この

花岡訴訟東京高裁和解についてのコメント

中国人強制連行・強制労働被害者による日本企業に対する戦後補償請求のさきがけとなった花岡訴訟が、原告・弁護士・支援団体をはじめとする関係者の粘り強い闘いと努力で、1989年以來の鹿島との交渉、95年以來の裁判闘争をへて今日ようやく決着したことを心より歓迎し、東京高裁や中国紅十字会をふくめた関係各位の努力と協力を敬意を表する。

97年の新日本製鉄(日鉄釜石訴訟、東京地裁)、99年の日本鋼管(金景錫訴訟、

東京高裁)、今年7月の不二越(韓国女子勤労挺身隊訴訟、最高裁)に続いて、日本企業相手の戦後補償訴訟で和解にいたった意義は極めて大きく、和解による解決方式が定着しつつあるといえる。内容的には、裁判の原告だけでなく、全生存者と遺族を含めた一括解決を実現した点、被害国の公的機関である中国紅十字会が補償実施機関として参加した点なども評価できる。早期解決を求める内外の声に押されて裁判所が従来にもまして強く和解勧告を行い、20回におよぶ和解協議のイニシアティブをとった積極的な姿勢も評価できる。

今回の和解を見届けることなく今月4日に亡くなった原告の花岡受難者連誼会会長の王敏さんをはじめ亡くなった原告・被害者の方々のことを想起すると、頑なな企業側の態度によって交渉や裁判に時間がかかり過ぎたことは大変残念であり、罪深い。他方、国の責任はこれまでの花岡裁判では直接問われてこなかった。国策として中国や朝鮮から労働者を連行し、苛酷な労働を強いた国の責任追及が今後の課題となろう。必然的に、国の責任追及は「慰安婦」や虐殺・細菌戦被害者、元捕虜・民間抑留者らを原告とする他の戦後補償請求訴訟と連動し、相互に影響していく。

米国での日本企業相手の訴訟や議会の動き、同じく今世紀中の決着をめざしたドイツ、オーストリアの強制連行補償基金設立の動きが今回の和解実現を、間接的に後押ししたと思われる。日本政府は、これ以上時間をかせぎ、責任逃れを図るのではなく、すすんで謝罪し、きちんと補償を実施することで、被害者の痛みを和らげ、「戦争の世紀」を教訓化する範をたれるべきである。中国だけでなく、南北朝鮮をはじめアジア各国の政府も世界中に生存する被害者も注目してその勇気ある決断を待っているのではないだろうか。

2000年11月29日

戦後補償ネットワーク
世話人代表 有光 健

*問合せは、Tel:070-5102-9994,03-3237-0217 へお願いします。

点に限って言えば、後氏のいうリ民主主義のゲームルに参入して政権交代を実現させたイタリアの経験例は示唆に富んでいた。

労働運動研究所の性格については十分知っているわけではない。単なる研究者が功名心から細分化された資料を多量に引いて、俺はこれだ

け知っているぞと意味連関が余りはつきりしないまま証拠品を誇示するのは仕方ないとしても、運動のなかの知識人が民衆(の心)を動かす提言をするばあい、その課題意識は当然違ってくるはずである。

私がつぎの機会には、日本をどうする、という課題に限定し、知識・

情報をテーマに求心的に活用して、討論が深化するようなシンポの開催を望んだのはそのためである。縁あって出た有意義な会の学恩を感じながら、精神の内的充実によって、帰りの新幹線で愚見をのべようと思熱が湧いたのである。